

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2016 年度第 2 回研究会)

日時：2016 年 12 月 4 日（日） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306 室）

概要報告

2016 年度第 2 回の例会として開催された本会では、共同研究員および外部講師による 2 題の研究報告がおこなわれた。参加者は 16 名であった。

(1) 立石謙次（AA 研共同研究員／東海大学）

「雲南省大理白族（ペー族）の白文（ペー文）研究：その現状と課題」

共同研究員の立石氏は、雲南大理地方を中心とする白族の歴史的研究をおこなっている。発表では、白族の白文を対象に、研究の現状と課題について報告がおこなわれた。

白族の間では、漢字を用いて白語を表記する白文が限定的に用いられてきた。白文の原型は南詔国・大理国の時代（8 世紀後半 - 13 世紀後半）には作られ、元・明代（1271 - 1644 年）以降、現在の白文に直接つながる表記体系が確立したと史料上推測できる。その上で、白文が白族全体の民族文字として規範化・普及しなかった原因は、白文の表記としてのわかりづらさよりもむしろ白族をめぐる言語環境が漢語・白語の併用を前提としていたためという指摘がなされた。

(2) 梶丸岳（京都市立芸術大学）

「歌を書くことと歌うこと：中国貴州省の山歌を事例に」

前回例会時に課題として提起された文字によって表記される前の状態（「テキスト前」）へ視点を向けるため、ゲスト講師として、隣接する貴州省およびラオスにおいて山歌研究をおこなっている梶丸氏に知見の提供をいただいた。発表では中国貴州省の掛け合い歌「山歌」において「歌詞を書くこと」と「歌うこと」の違いについて論じ

られた。

まず山歌の歴史的・社会的コンテクストを概観し、いかに山歌のパフォーマンスが状況に埋め込まれているか、言語人類学的観点からの分析が提示された。その上で山歌では書かれたテキストとパフォーマンスが結びついておらず、「書かれた歌詞を歌う」ことが山歌のレジスターに反していることが示された。さらにパフォーマンスがテキストとなることで起きる一般的な変化についての考察が示された。

(3) 全体討論

報告に対する質疑応答ののち、「テキスト前」段階の題材である「歌」を共通テーマに全体討論をおこなった。「歌」は音声表現であるものの、白族、プイ族のどちらにおいても、文化伝承が図られる場面においてテキスト活動がおこなわれている。しかし、テキスト化に対する社会・文化的意味づけは異なるようで、周辺民族においても一様ではない。こうした「テキスト前」からそのテキスト化、さらにその使用にかけての一連の過程を追うアプローチは、新しいテキスト研究の視点として十分に魅力的である。

全体討論に引き続き、新谷研究員（AA研フェロー）より、雲南と隣接するビルマ地域でのフィールドワークの現状報告がおこなわれた。昨年度来、フィールドワークがおこなえる状況であり、地域の民族文化動態の調査研究を深める絶好のチャンスであることが示された。

最後に、代表者の山田より、最終年度となる2017年度の研究会実施および成果出版についての計画が示された。来年度は発展的・継続的テーマによる3回の研究会を開催すること、プロジェクト出版物として8冊程度が予定されていること、3年間の成果としてテキスト研究に関わる論文集を企画していることが提案され、了承された。

（文責：山田敦士）